ＩＳ　～雷の鳳～

皎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ　～雷の鳳～

【Ｎコード】
Ｎ９６２３Ｔ

【作者名】
皎

【あらすじ】
銀河の中心部、αナンバーズの最後の決戦の折、トウマは異空間へと引き引きずり込まれてしまった。
この作者の作品は処女作となります。見苦しい点があるかも知れませんが、がんばって行こうと思います。よろしくお願いします。

序章

新西暦１９０年　　銀河中心部バスターマシン3号機跡

悪霊の王との戦士達の最後の戦いが行われていた。
無限力を引き起こした死と誕生により銀河に満ちた天文学的は悪霊を自らの力、負の無限力とする悪霊の王。

その圧倒的な力に無限力の試練の超えた戦士たちの心にも陰りを生じさせた。

それでも、諦めで死力と尽くし悪霊の王に抵抗した。
しかし、いくら倒してもすぐに蘇る悪霊の配下。
全力を尽くした攻撃も効かない悪霊の王。

多くの敵を倒してきた必殺の威力の秘めた攻撃は悪霊の王を倒すには届かず
掠めるだけで身も心も魂までも抉るような悪意の塊のような攻撃
傷つき一人、また一人と仲間が力尽き膝をついていく

徐々に、無力感にさらされ彼らの心に絶望の文字が現れていった。

その時、何かが彼らの耳に響いた

それは歌があった。

絶望に染まりかかった彼らの心に響いた歌の先には、今まで彼らの歩んできた苦難の道で出会った人々姿があった。

このメロディーは、彼らの仲間の一人。

人気バンド「ファイヤーボンバーズ」の歌手にして戦乙女の名を持つ真紅の起動兵器「ファイヤーヴァルキリー」を駆り戦場で歌い続けてきた熱気バサラが生み出した歌。

この歌は、熱気バサラが追い求めた完成させた歌。

彼の仲間の血と涙に彩られた戦いの中で生まれた希望への結晶、絆、友情、愛、勇気ある誓いによって紡がれた生命の歌。

その歌を、銀河の歌姫リン・ミンメイが歌い、歌う事で彼ら助けようとしている。

生命の歌は戦士たちの心に陰りを消し去る陽となり、戦士たちも歌いだす、絶望に悪意に負けないために、未来に希望を残すため。

生命の歌に応えるかのように、道半ばで未来のために命を賭け力尽き無限力の一部となった、肉親が友がそしてかつての宿敵が彼らを助ける力となってくれた。

希望を込めて歌う生命の歌と、彼らを助ける魂が悪霊の力を抑えた。

そして、無限力の数々の試練を乗り越えた彼らに無限力は彼らの認め力を貸す事により圧倒的な悪霊の王への対抗する事が出来る状況になった。

対するは負の無限力を持った　悪霊の王　ケイサルエフェス　抵抗できるとは言え、あくまで勝ち目が見えた程度の状況であった。
普通に考えれば敗戦は必須、撤退は出来ない全滅の負け戦に少し見えた程度の光、目を閉じれば消えてしまいそうなはかない輝きのようにな勝機。

だが、彼らにはそれで十分だった。

数多くの多くの絶望的な戦場を駆け抜けてきた彼らαナンバーズは今まで微かな勝機でもその手に納めてきた彼らには、はっきりとした勝利が見えていた。
故に今更臆す事もなく、悪霊の王へと向かっていく。

彼らの攻勢はすざまじく悪霊の王を追い詰めていく、しかし悪霊の王もただでやられているわけではなく恐るべき悪意による攻撃で彼らに次々と酷い損傷を与えて、さらには応援にきた人々を配下に狙わう戦法をとりだしたのだ。
それにより彼らは部隊を半分にして戦うしかなかった。全力を分散した事により膠着状態となり、攻撃部隊参加していた仲間たちは損傷で戦えなくなった機体を引きずり一人また一人と無念の言葉を残し戦線を離れていった。

彼らの怒涛の攻撃に追い込まれた悪霊の王はかつての仲間であるナシム・ガンエデンとその意識と共にあるイルイ・ガンエデンの説得により、決着がつくと気の緩みをつき彼らの母艦エルトリウムに取り付き縮退路を暴走させ道連れにしようとした。
ケイサルエフェスを引き離そうと火気を使えばエルトリウムの縮退路が暴走する。その状況下で最善を尽くそうとエルトリウムの船

員はケイサルエフェスと自爆の覚悟をした。そして、そのエルトリウムにはトウマ・カノウの最愛の人ミナキ・トオミネが乗っていた。

「トウマ。続け！」
その諦めに似た空気を打ち破ったのは黒い武神ダイゼンガーを駆るゼンガー・ゾンボルトの叫びであった。
それだけで、トウマには今までの戦場で培った経験そしてあくなき闘志により自分が何をすべきか一瞬で理解でき
「応！」
その返事を聞くや否や、ゼンガーは
「霊帝ケイサル・エフェス！冥府への案内つかまつる！」
と叫び、ダイゼンガーはケイサル・エフェスに向かって突撃する。
放つのはダイゼンガーの最も強力で多くの敵を倒してきた必殺の剣「斬艦刀・雲燿の太刀」
悪を断つ剣より放たれる必殺の一撃。

トウマは一瞬の勝機の見据え、力を溜める。

限界への恐怖、圧倒的な悪意に対する恐れを
倒しきれない、失敗するとう言った疑いを
成功できない、別の方法があるという迷いを
負の感情を呼び起こす

だが

仲間への絶対の信頼が
ミナキを思う心が
今までの戦場の記録が
負の感情を打ち破り

そして、ケイサル・エフェスを外道を倒すという不屈の闘志が
心を一つにする

「一刀！両断！！！」

トウマの信頼に応えるかのように、ダイゼンガーの太刀がケイサル・エフェスの体を両断する。
しかし、流石の必殺剣もその堅固な肉体に阻まれケイサル・エフェスの魂までは届かなかった。
ダイゼンガーの必殺の一撃を耐えたケイサル・エフェスが余裕を見せかけた。

その刹那、戦場に巨大な青白い雷鳥が舞い上がり、すざましい速度で上空へ駆け上がった。

そして、赤い雷にその姿を変えケイサル・エフェスに向かって急降下してきた。
それはトウマが大雷鳳が自分の体の機体の限界を超えて放つ奥義
「神雷」

「砕け散れえええええーっ！！」

宇宙の闇を切り裂く雷と化した大雷鳳の蹴りがケイサル・エフェスの体を
ケイサル・エフェスの魂を捕らえた。

今までの神雷ではおそらくケイサル・エフェスの魂には力が足りなかったであろう
しかし、今この場で放たれた「神雷」は

無限力に認められ
この場にいる仲間の思い
銀河に居る仲間たちの祈り
無限力に帰った人々

その全てがトウマに力を与えてた、この銀河最強の剣

故に

「銀河に消えろ…ケイサル・エフェス！」

巨大な火柱と共にケイサル・エフェスの魂を蹴り砕くのだった。
トウマのすべての力を、人々の願い、そして無限力の後押しを得た、この一撃は惑星でさえ粉砕するほど威力を秘めていた。
そう、それほどの威力を秘めていたのだ。
だが、その一撃でさえケイサル・エフェスを完全に滅することは出来なかったのだ。

滅することは出来なかった。
だが、致命傷である事は確か。
後一押しすれば倒せるのだ、それをトウマが確認した瞬間

「行くぞ、大雷鳳！俺達の最後の戦いだ」

限界を超えた一撃で悲鳴をあげる機体を鼓舞し
トウマは大雷鳳でケイサル・エフェスを捕らえ味方から全力で遠ざけていった。

今までの激戦でトウマの大雷鳳の全身すでにボロボロ
ケイサル・エフェスを抑えてる現状で、全身の所々で小さな爆発を起こし仲間が彼の元に駆けつけるまで押えつけている事は不可能であった。
それを悟ったトウマは、攻勢に転じた。

「もう、神雷を打てるほどのエネルギーは残ってないか、ならば！」
そう言い放つと捕まえていたケイサル・エフェスを機体の悲鳴を無視しジャイアントスイングの要領でケイサル・エフェスを物凄い勢いで振り回し始めた。
そして、大雷鳳の腕が砕けるのと同時にケイサル・エフェスを放り投げた。
トウマは大雷鳳のエネルギーを全て注ぎ込んだ、これから放つ最後の一撃のために。

「ケイサル・エフェス！付き合ってもらうぞ！地獄までな！！！」

彷徨と共にケイサル・エフェスに向かい大雷鳳は飛翔した。

飛翔した大雷鳳は上方へ投げたケイサル・エフェスにトドメをさす為に、トウマは力を振り絞り闘志を燃やし尽くし最後の一撃を放ったのだった。

トウマの蹴りがケイサル・エフェスを蹴り砕く瞬間、目を覆うばかりの閃光が走り後には、誰の姿も残っては居なかった。

ケイサル・エフェスは消滅し、残された負の無限力は急に動き出したイデオンで浄化され、同時にイデオンの機能も停止した。

これによりαナンバーズの最後の戦いは終わった。

～終焉の銀河より～

そして・・・・

序章（後書き）

前から書いてみたいクロスオーバーで、
第２次ＯＧＳに雷鳳が参戦するという事で書かせていただきました。

この場面がトウマを飛ばすにはこの場面が一番だったので入れた話でした。
最初だけクライマックスにならないようがんばります。

第一章

？？？

ケイサル・エフェスとの戦いの後、トウマは異様な空間に居た。
数々の戦場で異空間に入った事はあったが、今までとは比にならないほどの異質な空間であった。

特筆すべきは、空間すべてが闇に覆われ黒一色なのである。
目を見開いているのも関わらず、目の前に持ってきた自分の手が神に覆い隠されて見えないほどに暗い。
そして、全ての音が無くなってしまったかのように静寂なのである。

また、ケイサル・エフェスと対峙したような悪寒は感じるものの、トウマを害そうとする悪意は感じられない。
その淀んだ空気とは別の清涼とした微風が吹いている。
その風が緩やかだが大きな流れになっている。

そんな、異質な空間にトウマを乗せた大雷鳳は漂っていた。

全ての力を使い果たし漂っていたトウマの耳に微かな声が聞こえてきた。

「・・・・・・マ・・・・・」
最初の気のせいかと感じていた。

「・・・・ウ・・マ・・・・」
静寂な空間に聞こえてきた、意識を向けるだし
「・・・ト・ウ・・マ・・」
トウマの意識は徐々に覚醒していった。
「・・トウマ、聞こえますか？」

その声の主は女性のようであった。そしてトウマは、その声に思い浮かんだ名前で呼んでみた。

「・・イルイか？」
そう、言いつつあたりを見回すが姿は見えなかった。
しかし、声の主はトウマが意識を戻した事に安心した雰囲気で話し出した。

「いえ、私はイルイではありません。」
「イルイじゃないのか？」

「私はナシム・ガンエデン。イルイ・ガンエデンと共にあったものです」

その声は、イルイ・ガンエデンを巫女とその意識を共有していた地球の守護者。
封印戦争の折、地球を外敵から守るために地球を封印しようとした。
しかし、それは地球外に居る人間を見捨てる事。
外宇宙へ進出しようとする人類を地球で飼い殺しにする事であった。

それをさせまいとするαナンバーズとの戦いによりナシム・ガンエデンは破壊された。
そして、精神体としてイルイ・ガンエデンとの共生と、説得によりαナンバーズを認め、その力を貸した最後のガンエデン。

「私は、私の最後の使命を果たすために此処へ着ました」

「最後の使命？」

「本来は、私がゲペルを此処へ連れて来るはずだったのですが」

ナシムと話してを聞いている中で気になる単語を聞いたトウマは
「今、此処って言ったけど「此処」がどこかわかるのか？」

「此処は、まつろわぬ魂がその怨念をゆっくりと浄化し、流れの中へ帰っていく場所」

要約すると、此処は死後の世界「冥界」である。

「私もここに来て知りましたが、ケイサル・エフェスはここの流れを遮る弁になる事により強大な力を得ていたようです。
もう一人その流れを力としている者が居るようです」

ケイサル・エフェスの力の分かり易いイメージで言うと、
「冥界」を川で例えるならば
ケイサル・エフェスは「ダム」、流れを強引に遮る事により力を得る。
もう一つの存在が有する心臓「ディスレヴ」を「水車」、流れそのものの利用する事により力を汲み取る。

ケイサル・エフェス以外に、負の無限力を使っている者の存在を聞き、絶句しているトウマを他所にナシムは話を続けた。

「ただ、その人はこの力を悪しき事には使用しないのでしょう」

それを聞き、ホッとしたトウマは大事な事を聞く事にした。

「あいつは、ケイサル・エフェスはどうなったんだ？」

「ゲペルは消滅しました。ですが、彼の力が開放された事により流れに還ろうとした力はあなたをこの世界に引きずり込んでしまったのです」

ケイサル・エフェスは「ダム」である。

それも許容量満杯に満ちたダム。

決壊したなら、全てを押し流すような濁流となる。

そして、その濁流にケイサル・エフェスのトドメをさしたトウマは巻き込まれ、死後の世界へ流されてしまったのだ。

「俺はまだ生きているのか？」

「はい、だからこそ私が来ました。私の最後の使命はトウマ、あなたを生ある世界で帰す事なのです」

その言葉を聴いて、トウマの心に希望が出てきた。

「本当か！ミナキのところに、みんなのところに戻れるのか？」

「いえ、ゲペルの消滅による影響で、元の世界に戻るのは・・・」

「・・無理なのか？」

「・・・はい。ですが、ガンエデンの名に懸けて貴方を生命あふれる世界へ送り届けます」

返ってきた答えは残酷なものであった。

それと同時に、申し訳ない気持ちと共に精一杯の言葉を感じたトウマは、少し考え込み

ナシム・ガンエデンはイルイを通してαナンバーズの絶望的な戦いを見てきた。
彼らαナンバーズと対峙に力で圧倒しながら最後には打ち破られた記憶も持つ。

αナンバーズは微かにでも可能性でもあればその可能性に掛け、突破していく姿を見てきた。
そして、ナシム自身が最後はαナンバーズの一員であった。
そんな彼女から出た否定の言葉・・
その意味をトウマはその意味を理解し

しばらくの、沈黙の後トウマの口から発せられたのは

「・・・・・・俺さ、雷鳳に乗る前でもあの時代いろんなバイトやって生きてきたんだ。だから、どんな世界でも大丈夫だ」

それは、強がりだった。

「それに、その世界に悪党が居ても俺と大雷鳳なら戦っていける」

αナンバーズの仲間に、心の師であるゼンガーに、武を競い合う宿敵バランドバンにも
そして何よりミナキに2度と会えなくなる恐怖に負けないように

「だから、大丈夫だ」
トウマは精一杯の強がりを言う。

その強がりを察したナシム・ガンエデンは
「わかりました。どうか、お元気で」
その言葉と同時にトウマの頬に人の手の感触が伝わった。
それと同時に目の前に光が広がっていき、トウマの意識はゆっくりの薄れていった。

トウマの意識が無くなるころには、トウマはこの死の満ちた世界から生命あふれる世界へと向かって帰っていった。

残されたナシム・ガンエデンは
「イルイ、幸せになってください」
自分の巫女であるイルイに対して、まるで母親のように慈愛に満ちた声で言葉を送った後に流れに身を委ねた。

～命ある世界へ帰還・・・そして～

入学式・前日　ＩＳ学園・敷地

「ようやく、新入生の授業の準備が終わったか。・・・明日からは、あいつもここにくるのか」

そう呟きながら歩くスーツ姿の女性「織斑　千冬」
ＩＳ学園の教師である千冬は、授業の準備を終え、敷地内を歩いていた。

ＩＳ学園は、世界からＩＳ操縦者を育成する事を目的として人が集まるのである。
その特性上、世界各国の有力者の娘も多く、保有するＩＳの数も多い。
その為、令嬢の誘拐事件、ＩＳを盗もうとする盗難事件が過去に起きかけた事例もあった。そのような事が無いように、ＩＳ学園の防犯は徹底しているのだ。

だが、この時期は引越し業者等、人の出入りの激しく、手薄な部分が出来やすい。
そこで実力者を教師で固めているＩＳ学園では教師が交代制で学園の見回りをしているのである。

そして、ちょうど授業の準備が終わった千冬は準備に忙しい同僚の替わりに敷地の見回りをしていたのだった。

千冬がしばらく歩いたところで、人影を見つけ不審人物と判断すると、その人影に向かって走っていった。

人影のそばに走っていくと、それが男性が倒れている事が分かった。

不審人物ではあったが、どうも様子がおかしい為、携帯で同僚に連絡を入れた後に千冬は警戒しながら、声を掛けた。

「意識ははっきりしているか？」

声を掛けると倒れていた男は徐々に意識を取り戻し顔を千冬に向けた。

「どうやら意識はあるようだな」

「ああ」

「では、ここに侵入した理由を言ってもらおうか」

その言葉を聴き、男とあたりを見渡した後

「ここって軍の施設か？」

どうも、この男は目の前の千冬を軍人と思ったらしい。

そして、その言葉を聴き千冬は違和感を覚えながら改めて聞きなおした。

「ふざけているのか？ここＩＳ学園に侵入した理由を聞いている」

「ＩＳ学園？」

男は、この世界ではＩＳ学園という知らない者が居ないであろう単語に不思議な顔をしていた。

そして、男は何か思い当たる事があったのか慌てた様子で聞いてきた。

「なぁ、宇宙怪獣、ＳＴＭＣ、星間連合、地底勢力、ザフト、ゾンダー、マクロス、αナンバーズって知ってるか？」

「いや、聞いたことも無いが？」

その言葉が聞いた、瞬間男は酷く落胆し

「・・・やっぱり違う世界か」

と呟いた。

落胆した男を見て気にはなったが、千冬は自分のやるべき事を優先することにした。

「名乗っておこう、私の名前は織斑千冬。ここＩＳ学園の教師だ。落胆しているところ悪いが、名前と身分証明書を見せてくれないか？」

千冬が名乗った事で、落胆していた男も気合を入れるかのように、両手で自分の顔を叩き

意思の篭った瞳で千冬の顔を見据え

「俺はトウマ・カノウだ。」

と力強く名乗った。

第一章（後書き）

難産でした。
会話は難しいですね。

出来るだけキャラの口調を壊さないように気をつけました。
気になる点があれば教えていただけるとうれしいです。

前回の場面からいきなりＩＳの世界へは芸が無いと思い、死後の世界を捏造しナシム・ガンエデンにゲスト参加していただきました。

後、ケイサル・エフェスとディスレヴの力の違いは私独自の解釈として書かせていただきました。
また、ＩＳ学園の防犯意識は非常に高いと思います。

第二章

入学式・当日　ＩＳ学園・１年１組　２時間目

「ホームルームで話したが、手続きの関係で遅れていた者が到着した。・・・入って来い」

扉がゆっくりと開いていき、ＩＳ学園の制服に身を包んだトウマが教室の中へと入っていった。

そして、教壇に立ち女性しか居ない空間で、視線を集めながらトウマは心の中で溜息をつきながら何故こんな事になったのか思い、昨日の出来事を思い出していた。

入学式・前日　ＩＳ学園・応接室

トウマはお互いに名乗りあった後、千冬に連れられＩＳ学園にある応接室に通され、尋問されていた。

身分証明書であるαナンバーズのＩＤカードの提示

簡単な質問などが行なわれた

αナンバーズのＩＤカードに記載されている情報

トウマ・カノウ　男　年齢２０

所属　銀河中心殴り込み艦隊　精鋭部隊αナンバーズ　第１小隊

小隊長

階級　ＧＧＧ所属民間協力員

搭乗機　ＤＧＧ－ＸＡＭ３Ｃ　大雷鳳

見たことのない
見たことのない材質で作られたカード
高性能なＩＣチップ
千冬はＩＤカードから得られるトウマの情報を訝しげ見つめた

そして、トウマの口から語られる
αナンバーズでの戦いの軌跡
流石に核心部を話すことはしなかった
そして、ある戦いの折に異空間に飛ばされた事。
そこから脱出した際にこの世界に来てしまった事。

さらに、ワープ航行がある程度確立されている事なども伝えた。

トウマの話を千冬が注意深く聞き
ＩＤカードとトウマの話した事を頭の中で整理した。

状況証拠からは限りなく黒なのだが、物的証拠は白
証拠から判断をするのは困難と感じた。千冬はトウマの人柄を見て直感で判断する事に決めた。
本来、ＩＳ学園の教師だからと言ってそこまでの権限は無い。
しかし、かつての世界最強の操縦者であり今でも影響力の大きい千冬は、他の教師とは比べ物にならないほどの権限を与えられていた。
そして、トウマの動向を探るために

「君はこれからどうするんだ？」

千冬はトウマに問いかけた。

ＩＳ学園に潜入を目的としているのならば経歴を盾に関係者になろうとするであろう、という打算。
千冬個人の興味から来る質問をトウマへ投げかけた。
「バイトをしようと思う」
「・・は？」
即答で帰ってきたその答えは、完全に千冬の予想外であり、混乱させるのに十分であった。
「生活の基盤無いから、金稼がないといけないんだ」
その現実的な言葉に千冬も冷静となり
「・・そうか。しかし、あては無さそうだな」
その言葉でトウマは内心冷や汗をかいてるのが顔に出ているのを見て
（なるほど、こいつは嘘をつけないタイプか）
流石にこのままと言うのも気の毒に感じた千冬は
「私の方からバイト先を聞いてみよう」
その言葉に反応したトウマは
「ありがとう。助かる」
満面の笑みで返した。
それを見て千冬は、トウマの事を悪い奴ではないと評価した。
話が一区切りついたところで千冬が切り出した。
「ところで、カノウ。ＩＳの事知らないのだったな。大まかにだが教えてやるから知識として覚えておけ」
そういうと、トウマの返事を黙殺してＩＳについての説明を始め

た。

正式名称「インフィニット・ストラトス」。
宇宙空間での活動を想定し、開発されたマルチフォーム・スーツ。
、宇宙進出よりも飛行パワード・スーツとして軍事転用が始まり、
各国の抑止力の要がＩＳに移っていった。
原因は不明であるがＩＳは女性にしか動かせず、それが原因でこ
の世界は女尊男卑の世の中になってしまった。

そして、ＩＳ学園とはＩＳ操縦者育成用の特殊国立高等学校。
操縦者に限らず専門のメカニックなど、ＩＳに関連する人材はほ
ぼこの学園で育成される。
また、学園の土地はあらゆる国家機関に属さず、いかなる国家や
組織であろうと学園の関係者に対して一切の干渉が許されないとい
う国際規約があり、それ故に他国のＩＳとの比較や新技術の試験に
も適しており、そういう面では重宝されている。

「・・、大まかに話したが理解できたか？」
「ああ、知らなかった大変な事になってた・・。助かったよ。」

トウマと話していて千冬の中に予感めいたもの感じた。
前例が無ければ、気の迷いとして捨てていたであろう、予感。
そして、それを確認するためにトウマにある提案をする事にした。

「ＩＳは見たこと無いのだろ？特別に見せてやってもいいがどうす
る？」

～ＩＳ学園へ～

入学式・前日　ＩＳ学園・アリーナ

千冬に誘いに乗り、トウマはＩＳを見に着てきていた。

「これが第２世代ＩＳの打鉄だ」

ＩＳと呼ばれ目の前には鎮座している機体は黒塗りの鎧武者を連想さた。

そして、トウマの目の前の黒塗りの鎧武者に目を奪われた。

黒塗りの鎧武者はトウマが心の師と仰ぐゼンガー・ゾンボルドの愛機ダイゼンガーを無性に連想させた。

黒塗りの鎧武者に誘われるかのようにトウマはゆっくりと近づいていき、そっとその装甲に触れた。

その直後、金属音が聞こえたと同時にトウマの意識に直接情報が送られてきた。

打鉄が起動したのであった。

男では機動しないはずのＩＳが、今この瞬間、世界で２人目のその身を許したのである。

機動を見つめながら千冬は自分の予感が正しかったのだと実感していた。

千冬に予感を信じさせたのは、男でありながらＩＳを動かした存

在。
世界で始めて男でＩＳを動かした存在。
彼女の弟である織斑一夏の存在があったためである。

予想していた千冬とは対照的に慌てたのはトウマであった。
起動しないと言われたものが急に起動したのだ。
驚いたトウマは勢いよく打鉄から手を離しその場に転んでしまった。

その様子を苦笑しながら見つめ、ある重要な決定事項を伝えるために千冬はトウマに近づいていき、そこでさらに重要なものを発見する事になった。

それは、転んだ拍子に現れたのであろうペンダント
雷と鳳凰をあしらった和風のデザインのペンダント
それだけならば、ただのアクセサリーで済んだであろう。
しかし、それはこの世界で重要な意味を持っていた。

千冬は厳しい声でトウマに問いかけた

「カノウ、そのＩＳはどこで手に入れた？」
それは、ＩＳの待機形態であったのだ。

そう問われたトウマは理解できていない。
なぜなら、トウマにとってＩＳとは目の前の鎧武者であるのだ
自分の首にかかっているペンダントがＩＳの待機形態だとは理解できては居ない。

そのトウマの表情を見て理解できていないのを悟った。
理解できたからこそ、重要な決定事項を告げる事にした。

「カノウ、まずバイトの件は諦めてくれ」
その言葉にトウマの顔に驚愕の表情が浮かぶ、トウマが声を発する前に千冬は次の言葉を発した。
「お前には、ＩＳ学園に入学してもらう。男でＩＳを機動でき、さらにＩＳを持っている人間を野放しにはできない。確定事項だ、諦めてくれ」
そう言い放ち
「後、手続きは私のほうでやっておく。年もごまかしておく」
と付け加えた。

入学式・当日　ＩＳ学園・１年１組　２時間目

女性ばかりの空間に気圧され、昨日の出来事を思い出しながらトウマはクラスを見回していると
そこには一人だけ男性の織斑一夏の姿であった。
残りは全員女性ばかりの空間
急に登場したもう一人の男のクラスメートの登場に驚き、クラス全体が沈黙に覆われている。

その空気を、このクラスの副担任である山田真耶が
「あ、あの、カノウくん自己紹介してくれるかな？」
自己紹介を促す事で緩和した。
このままと言う分けにも行かないのでトウマは
「カノウ　トウマです。よろしくお願いします。」

こうして、ＩＳ学園での生活は始まった。
他のクラスが授業中と言う事もあり、千冬に釘を刺され
クラスメイトは騒がず、トウマが席に着きそのまま授業が始まった。

αナンバーズで超科学の塊に触る機会のあったトウマではあった。
確かに、αナンバーズの中核の科学者であれば基礎知識なのだろう。
しかし、トウマはパイロット。
決して頭は悪いわけではないがＩＳの専門知識を予備知識なく分かる訳もなかった。

すると、もう一人の男子である一夏が困った表情で
「先生・・ほとんど全部分かりません」
と手を上げ発言し、真耶は困惑した表情で
「え、ぜ、全部ですか・・？え、えっと、今の段階でわからないっていう人はどれくらい居ますか？」
これには困っていたトウマも助けが着たかと言う表情になり、控えめに手を上げた。
すると、教室の端に控えていた千冬が
「・・カノウはともかく、織斑入学前の参考書は読んだか？必読と書いてあっただろう」
一夏は思い出すと、気まずい表情をし
「・・・・間違えて捨てました」

そういった瞬間、千冬は出席簿で一夏を殴り
「あとで、再発行してやるから、一週間で覚えろ。カノウもだ・・いいな？」

一夏は抗議を言いかけた。

しかし、千冬は強烈な威圧感を出し

「やれと言っている。」

その眼光に睨まれ、トウマと一夏に残された言葉は

「「はい、やります」」

肯定しかなかった。

そして、授業は滞りなく進んでいった。

第二章（後書き）

ＩＳ学園入学と２時間目までの話でした。
話は出来ていたのですが、納得できなくて書き直しと大幅カットしてました。

入学式の最初からいなかった理由ですが
入学式の前日に来た人間を次の日に入学ってのも無茶苦茶だなっと思い午後からにしようと思いました。
しかし、それだと３時間目におこるクラス代表イベントが終わってしまっているため２時間目という変なタイミングになってしまいました。
前日に来た身元不明者を次の日の２時間目に入学させることが出来たのは、千冬さんの権限の大きさによるものだと思ってください。

ここまで導入編ということでトウマにはおとなしくしてもらっていましたが、
次回当たりから動き出してもらうつもりです。

次回トウマ用ＩＳを登場させる予定です。

第三章

ＩＳ学園・１年１組　２時間目休み時間

トウマは机で項垂れている一夏に話しかけた。
「よお、俺はカノウ　トウマ。よろしくな、俺のことはトウマでいい」
その声に一夏はトウマのほうを向き
「オレは織斑　一夏。いや～、トウマが来てくれて良かったよ。オレ一人で不安でさ・・」
トウマはその一夏の表情を見ながら、周囲から注がれる視線をひしひしと感じた。

共学の中学校から来た一夏はもちろんのこと

トウマ自身もαナンバーズでも基本男女の比率半々な状態
よく話すメンバーもミナキを除けば男がほとんど
さらに、その男も漢に分類される側だ。
ここまでの女性の視線を集めるなんてことは経験など無かった。

この状況に、これからの生活に不安を感じ

「確かに・・この生活は、一人っきりだとつらいよな」
トウマは疲れた顔で答えた。

（（・・・こいつとは仲良くしていかないと））

トウマと一夏は、同様の境遇で同性という「共通の仲間」という

認識を持った。
もともと気さくな二人であった為すぐに打ち解けることが出来た。しばらく話した後二人は共通の難問である参考書をどうするか話していた。
「・・・覚えておかないと、千冬姉に絶対殺される。参考書古い電話帳と間違えて捨てるんじゃなかった」
と、一夏が項垂れて呟きトウマもあの時の千冬の表情を思い浮かべ
（・・絶対やりそうだな）
と思い引きつった表情を浮かべていた。

「ちょっと、よろしくて？」
聞こえてきた声に、トウマと一夏はそちらの方を向いた。金色の髪をしたエリートと言う雰囲気を持った女の子が立っていた。
「ああ、何か用かい？」
何気なくトウマが返した返事に、女の子とはわざとらしく声を荒げた。
「まぁ！なんですの、そのお返事。イギリス代表候補生であるこのセシリア　オルコットに対して、それ相応の態度があるのではないかしら？」
この金髪の女の子セシリアは口調はともかくとしてホームルームに居なかったトウマに名前を教えに来たのかとも思えた。
もっとも、別の意図があったのだが、
「本来ならわたくしのような選ばれた人間と、クラスを同じくするだけ・・・」

キーコンカーコーン

その言葉はチャイムの音で切れられてしまい
「話の続きは、また改めてよろしいですわね？」
そう言い残し、自分の席へ帰っていった。

その姿を見送ったトウマは
（代表候補生って・・エリート将校みたいなものか）
と思いながら
「なにがしたかったんだ？」
と発した呟きに一夏は
「・・・さぁ？」
としか返せなかった。

ＩＳ学園・１年１組　３時間目

「これより、再来週行なわれる。クラス対抗戦にでる代表者を決める」
３時限目は、今まで教壇に立っていた真耶は後ろに下がり千冬が教壇に立って発した一言により始まった。
「クラス代表者とは対抗戦だけでなく、生徒会の開く会議や委員会への出席・・・まぁ、クラス長と考えてもらっていい。自薦他薦は問わない、誰かいないか？」

入学式当日に行なうのだから各自の実力など分かるはずも無いので、この場合「代表候補生」と言う肩書きが力を発する。大体の候補生は自分の肩書きを自己紹介のときに言うのだからクラス中で実力者と認識される訳である。そして自薦他薦は問わないと言う事も

あり、実力者ならばと大抵は各国から来ている代表候補生がクラス代表になるのが通例なのだ。
イレギュラーでも発生しない限りは、代表候補生＝クラス代表と言う事になっている。

「ハイ、織斑君を推薦します」

しかし、この場に男でＩＳを動かせるというイレギュラー織斑一夏が居た事で通例は狂いだした。

通例など露と知らず、推薦された一夏はその事に戸惑い、焦っていた。
そんな時、別のクラスメイトが違う名前を上げた

「私は、カノウ君がいいと思います」
その名前はもう一人のイレギュラーであるカノウトウマであった。
一夏の光景を見てトウマも若干予想はしていたようではあるが、一夏同様に戸惑いの表情を浮かべた。

その言葉にトウマと一夏を推す声は強くなっていった。

そして、これに内心焦ったのはセシリアであった。彼女の頭の中では『代表候補生である自分が推薦され、しかたなくクラス代表になる』と言った筋書きが合ったのであろう。
それがイレギュラーで思い通り「推薦」してもらえず、このままでは「自薦」するしかないと言う事に憤りを感じていた。
代表候補者としてのエリート意識と父に対する思いがその感情を大きくしていった。

「他にはいないのか？いないならこの二人のうちどちらかに決戦投票だぞ」
千冬の弟と言う立場が大きいのが一夏を推す声は、トウマを推す声より強くこのままでは「まずい」と感じた一夏は抗議の声を上げようとした。

「納得がいきませんわ！」
しかし、その声は後ろから聞こえてきたセシリアのこえに打ち消された。
千冬の言葉に、セシリアは我慢できずに大きな声を上げた。
「そのような選出は認められません！男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

次にセシリアが言おうとした言葉は彼女自身決して言うつもりは無かった言葉であった。
ＩＳ学園は日本にある以上在学者の半分が日本人
つまり、クラスの半分以上が日本人なのだ。
一夏や男に対する文句であるなら許されるのだろうが、国に対して言おうものならわだかまりが出来てしまう。
本来、聡明であるセシリアがそのような分からないはずは無いのだが、感情を顕にし頭に血が上ってしまった彼女はその言葉を発しようとした。

「本来・・・「ちょっと待てよ」」
「・・え？」
そのセシリアの声を遮ったのはトウマであった。
「あんた・・セシリアだっけ、代表候補生って強いんだろ？」
「と、当然ですわ。わたくしは、候補生として選出されたエリートなのですから」

「なら、勝負で決着を着けないか？」

話し合いでは決着が着かないと感じたトウマは一番シンプルな解決方法を提示した。もっとも、トウマの中にＩＳと言う未知の機体とその操縦者の中でも強いと称する代表候補生との戦いに興味が合った事が最大の理由ではあるが。

そのトウマが出した解決方法にセシリアは余裕の表情を見せ

「望むところですわ」

自信に満ちた声で答えた。

トウマは一夏に顔を向け

「一夏もいいな？」

「ああ、いいぜ！」

一夏もうなずき返した。

様子を眺めていた千冬はセシリアの言葉を聞いた後、満足げな表情を浮かべ

「話はまとまったな。それでは勝負は、次の月曜。第３アリーナで行なう。各自はそれぞれ準備をしておくように」

その言葉を締めに授業が開始された。

～再会する宿敵～

ＩＳ学園　第２アリーナ　放課後

トウマは千冬に呼び出されて第２アリーナに来ていた。
「急に呼び出してすまんな、お前のＩＳのデータを取っておきたくてな」
呼び出した千冬の思惑は、未確認であるトウマのＩＳの確認とデータ収集であった。
トウマ自身もこれから自分が扱う機体である、このＩＳがどんなものであるか知りたいと思っていたので快く了承した。
「まず、ＩＳに意識を向け集中し呼びかけてみろ、それで展開できる。やってみろ」

トウマは千冬に言われたとおり、首に掛かっているペンダントに意識を向け、今まで大雷鳳を駆っていたように意識を集中し束ねた。
（来い！）
そう心の中で呼びかけた、それに応える様にトウマの体は光に包まれ次の瞬間には、その身には機械の鎧に包まれていた。

全体的に白を基調とし各部に黒と金色の装飾彩られた雷鳳を思い出させるカラーリング
標準のＩＳと同じく、コアと腕や脚などの部分的な装甲となっており
雷鳳の脚部に搭載されていたプラズマコンバータがスラスターの位置に展開されていた。
そして、頭部にはＩＳには不釣合いなゴーグル状ユニットがハイ

パーセンサーとつながる形で存在していた。

トウマがＩＳを展開した事を確認すると
「よし、展開できたな。・・よし、データを確認する。ついでだ、カノウも動いてそのＩＳに慣れておけ」

次の月曜に行なう勝負のことを思い出したトウマはそう言うとＩＳを動かし飛行を行ないだした。
「次の月曜日にセシリアたちと勝負だ。今のうちに慣らしをしておこう」
最初のうちは、危なげな飛行をしていたものの「ダイレクト・モーション・リンク」を搭載した大雷鳳での戦闘経験のおかげで十分も経たないうちには安定して飛行できるようになっていた。

安定して飛行が出来るようになったトウマは、ＩＳを使い今まで大雷鳳で戦ってきた戦闘スタイルである格闘の型を行ないだした。

そのトウマの様子を横目で見た千冬は
（・・あの動きは、実戦で身についた動きのようだな。格闘技が得意そうだな・・・忠告だけはしておくか）
と思いながらデータを的確に取っていった。

それから十分程経過した後、
「カノウ、データは取り終えたから上がれ」
「分かりました」
その指示に従い、トウマは千冬のそばに降り立ちＩＳを解除した。
「お前のＩＳの評価だが・・・驚いたぞ。まさか第３世代の量産試作機を見るとは思わなかった。基本スペックは第３世代にしては、

やや低めだが燃費や安定、汎用性は郡を抜いているか、特殊兵装として組み込まれているプラズマコンバータの完成度も高いバランスの良い機体だな」

現在、存在した第3世代のＩＳは実験機のみであり、量産を目的に作られた機体は存在しない。

そんな現状に表れたこのＩＳの存在は、世界に与える衝撃は計り知れないものであった。

ＩＳのデータを解説していく千冬の話を聞きながら、トウマはふと自分の体に違和感を覚えていた。

それは、かつて雷鳳に搭載されていたシステムによって引き起こされた激痛とは別物であり、痛みを伴わない違和感のようなものであった。

そのため、トウマ自身も始めて乗ったＩＳで慣れていないせいであると思ってしまった。

「特殊兵装以外の装備は」

しかし、次に聞こえた言葉によって凍りついた。

「このＩＳに登録されている名前はＬＩＯＨ。機体の出来も良いが搭載されている、インターフェイス　システム「ＬＩＯＨ」の着眼点が面白いな」

（・・・今、なんて言った？ＬＩＯＨ？　雷鳳じゃないのか！？）

凍り付いていたトウマを動かしたのは、やはり千冬の言葉であった。

「操縦者の適正に合わせて、機体をオートで簡易的に専用機にするシステムか、操縦者を主体に考える思想で作られたシステムは無かったな」

その言葉に信じられないトウマは千冬に詰め寄り

「本当か？本当にそれだけか？ＬＯＩＨはそんな生易しいものじゃない！！」

「落ち着けカノウ！お前これがどういうものか知っているのか？」

千冬の怒鳴り声に、少し落ち着きを取り戻し

「・・すいません。システム　ＬＩＯＨは・・・」

トウマがシステムＬＩＯＨについて話し出した。

システム「ＬＩＯＨ」

正式名称は「Ｌｅａｄ　Ｉｎｎｏｖａｔｉｏｎ　Ｏｒｇａｎｉｃ　Ｈａｒｍｏｎｙ」

それは、ミナキの父カオル・トオミネ博士が開発した。素人でも機動兵器を簡単に操縦でき、さらに実力以上の力を発揮できるようになる画期的なシステム。

しかしその実態は、パイロットに極度の緊張感を与えることでいわゆる「火事場の馬鹿力」を出させるというパイロットへの負荷が非常に大きい危険なものだった。

トウマは自身、このシステムを使い続け暴走し仲間に襲い掛かってしまった経験も持っている。

愛機である大雷鳳の致命的な設計ミスが発覚し、それを補うにはシステム「ＬＩＯＨ」必要と言われた

しかし、トウマは自らの限界を超える奥義「神雷」を会得する事により、その致命的な設計ミスさえも克服し、システム「ＬＩＯＨ」

を超えた。
トウマが戦場に初めて立って生き残れ戦士になる力を与えた存在であった。しかしそれと同時にトウマにとっては決して認めることの出来ない仇敵でもあったのだ。

「・・限界を超えたパイロットの最後の生命の炎を燃やし尽くす、特攻モードまで組み込まれています」
トウマの話を聞き終わった、千冬は
「そうか、確かにこのまま使うわけにはいかないな。調査のためにもしばらく預からせて貰う」
ＩＳに慣れておきたいと言う気持ちはあったが、システム「ＬＩＯＨ」が搭載されている以上トウマの結論は一つであった。
「はい、お願いします。」

ＩＳを預けたトウマに千冬は事前に持ってきて置いたであろう「お前の部屋の鍵だ、場所は寮に行けば分かるだろう。それと参考書だＩＳで気になるだろうが一週間で覚えておけ、いいな？」
部屋の鍵と参考書、きつい一言と、もう一つの爆弾を渡し去っていった。

トウマはＬＩＯＨのことを千冬に任せ、自分はやるべき事をやろうと気分を切り替えにと、いつものトレーニングメニューをこなし寮へ向かっていった。

寮の部屋は相部屋だったが同じ部屋の人間は居なかった。
机に向かっているとＬＩＯＨの事や最後に千冬に言われた言葉

「・・カノウ、お前格闘技が得意みたいだが、ＩＳで格闘技を主体にすれば間違いなく勝ち目は無いぞ。・・・その答えをしりたければ、まぁ参考書でも覚えればわかるはずだ」

（・・一週間で覚えろって言ってたし、やるしかないか・・・あの目はやばいし）

千冬に言われた言葉を確認するため、参考書を読む事にした。
一夏が電話帳と言うだけはあり、そのページ数の多さは見るだけで読む気を失くさせる物であった。
見た目の量で読む気を失うものの、トウマは意を決して参考書を読み出した。
見た目に反し、内容は大量の文字を羅列しているだけではなく、図や表などを巧みに使い理解しやすいように作られた参考書だった。
超科学で作られた機動兵器を数多く所持するαナンバーズにいたことで、感覚的にではあるが理解できてきた事もあり、座学の苦手な方であるトウマであっても、自分の予想以上に早く理解できたのは嬉しい誤算であった。

（・・そういうことだったのか。これじゃ格闘で戦え無いな）

しばらく、参考書を読んでいたトウマは千冬の言った事が理解できていた。

（ＩＳでの格闘戦は、ピンポイントバリアの無いヴァルキリーで殴り合いのやるみたいなものか）

ＩＳで格闘できない理由
それは、ＩＳは武器を持って戦う事を前提にされているために、

素手による格闘戦を想定して設計されていないという事であるのだ。

素手で格闘したいのであるならば、一番の部位的に問題があるとするなら、腕部部分装甲の手の構造であろう。

武器をもって戦う事を前提にしているため、構造が精密で出力全快で殴り合いが出来るほどの耐久力が無いと言う事だ。

脚部にある部分装甲は歩行こそ出来るが、ＩＳ自体が飛行をメインにしているために脚部にはスラスター等が組み込まれ柔軟性が皆無である事。

実際、精鋭部隊であるαナンバーズにおいても殴り合いがまともに出来る機体はスーパーロボットクラスの特機でなければ存在しないのだ。ＩＳは確かに特機ではあるものの、分類としてはモビルスーツやヴァルキリーなどに近い分類の機体なのだ。

モビルスーツやヴァルキリーが格闘戦を主体にしない理由はパワー、耐久力、機体消耗以上に、武器による攻撃の方が安定して強いからなのである。同じ分類に位置するＩＳも同様で、武器を持たず素手での戦うこと自体が想定されていない。まして殴り合いが出来るスーパーロボットクラスの特機の中でも素手のみで戦う大雷鳳を愛機とするトウマの戦闘スタイルについてこられるＩＳは存在するわけも無かった。

仮に出来たとしても、ＩＳ同士の防御力は規定範囲内も誤差で同等、パワー自体も極端な差が無く、ぶつける部分に柔軟性が無いので反動が逃げないと言う問題点が出てくる。しかも、シールドバリアーという壁があるので装甲の弱点を突き突破すると言う方法が取れないのだ。

もっとも関節技などの相手をロックする技であるならば有効であろう。

トウマの得意とする戦闘スタイルは全身を砲弾とし蹴りを全力で敵にぶつける事により撃破する言った物なのである。しかし、この戦法は強靭さと柔軟さを兼ね備えたＤＧＧだからこそ可能な戦法であった。もしも、この戦法を一般の機体でやろうものなら、全速力で飛んでいる戦闘機が同規格の戦闘機に特攻するようなものなのだ。

結果は両者撃墜という結果にしかならない。ＩＳの場合、撃墜という結果は起こらないものの全速で敵を殴ったとした場合、その衝撃が敵だけなく自分にも返ってくる自爆技にしかならない。

流石のトウマも今までの戦闘スタイルが出来なくなったことを確信し、若干へこんだ。しかし、その事を見越したかのようにトウマの鍛えた鉄也や仲間達は色々な訓練を課していたのだった。

その事を思い出したトウマは若干気が軽くなり、心の中でαナンバースの仲間にお礼を言いつつ最後に

「・・ミナキ、この世界でまたＬＩＯＨに出会ったよ。だが、俺は決してＬＩＯＨには負けない！」

そう言い再び参考書へ挑んでいくのだった。

第三章（後書き）

トウマにとっての宿敵はバラン・ドバンではありますが、ＬＩＯＨも彼にとっては宿敵ではないかと思い、宿敵という表現をして見ました。

多くのバイトをこなしているトウマは敬語を身につけていると判断し教師陣に対しては敬語の口調にしていこうと思います。

雷鳳が量産試作機であった為、第１世代戦術用量産試作機なる物しようかと思いましたが、その後の制限が激しくなりそうなため、第３世代量産試作機にしました。

何故、このようにしたかは次回のあとがきで

後、追加して欲しいキーワード等あれば教えてもらえれば助かります

追記

・格闘が使用できない理由の部分加筆しました

第四章

クラス代表決定戦当日　トウマＶＳセシリア戦

入学式の次の日、トウマの部屋はどうなってる？と一夏は聞いてきたた、何気なく相部屋だけど同居人はいない事を告げた。すると一夏と隣の女子生徒は驚いた表情をしていたのだ。
その訳は、一夏の部屋が間に合わなかったのと言う理由で隣の女子生徒こと幼馴染の篠ノ之　箒と同室になっていたのだ。
流石に千冬が苦手な一夏ではあるが抗議しない理由もなく、千冬で詰め寄っていった。

もっとも、一夏の陳情も千冬に黙殺されてしまったのだが。それ以降、一夏はトウマの部屋を唯一の憩いの場として頻繁に溜まるようになっていった。

クラス代表決定戦の特訓に一夏はトウマも一緒にどうかと誘ったのだが、占い屋でバイトした経験があるためか、箒が一夏に好意を持っている事は分かっていた為やんわりと断りを入れた。
トウマは心の中で、他から見たらお似合いなのだが箒の好意に自覚の無い一夏と箒の気苦労を思い深い溜息をついていた。

ＩＳに慣れたかったのだが、調査に出したＩＳは一向に戻ってくる気配はなく、千冬に聞いても調査中の返答だけであった。

その為にトウマの一日のメニューはαナンバーズで行なっていた。
朝と夕方にランニング、ウェイト・トレーニング、空手の型
寝る前にウェイトトレーニング
組み手の相手が居ない事は不満ではあったが、基本的なものをこなして行った。

トウマにとっては基本的なものであった。しかし、他の人間から見たらオーバーワークもいいところで、その光景を見ていた眼鏡をかけた水色の髪の女子生徒から心配されたほどであった。
そして、入学式から一週間はあっという間に過ぎ・・クラス代表決定戦当日になった

クラス代表決定戦当日　トウマＶＳセシリア戦　第３アリーナ
Ａピット

クラス代表決定戦に出るトウマと一夏、そして一夏に付き添ってきた箒がＡピットに来ていた。トウマは、一夏と箒の会話を聞きながら特訓の内容は自分と大差ないのだなと思い、箒の邪魔しなくて良かったと思っていた。
そう考えていると、真耶と千冬がやってこれからの試合の流れを説明しだした。話によると一夏の専用ＩＳの到着が遅れており、調査のために預けたトウマのＩＳが先ほど届いたと言う事だ。
時間を無駄に出来ないために、ＩＳがある者同士が先にやると言う事になりセシリアとトウマの試合が行われることになった。

真耶に連れられピットに入ってきたトウマの目の前には調査のため、千冬に預けていたＩＳ「ＬＩＯＨ」が鎮座していた。
「すまなかったな。システムＬＩＯＨの調査が思った以上に難航してしまってな、調整などやっていたので予想以上に時間がかかってしまった。」
前例の無いシステムのため調査だけに留まらず、システム不備でもあったのか調整も行なっていたという事であった。
「結果はどうでした？」
トウマは気になっているシステム「ＬＩＯＨ」の結果について率直に訊ねた。
「調査結果は、システムの優先度としてはサブの中でも制御しやすくタイプのシステムであるため問題は無いということだったな。しかし、解析できないブラックボックスを持つ為、不安要素が大きい。摘出も考えられたらしいが調査の結果できないらしい。その為、調整が行なわれている。試合するには問題は無いな」

千冬が簡潔に説明した為、流石にトウマも納得できない表情を浮かべた。
そこに真耶が補足を入れた
「トウマ君のＩＳに搭載されているシステム「ＬＩＯＨ」はゴーグル状の外部ユニットになっていて一見取り外しができそうなんですがハイパーセンサーと直結していて取り外そうものならハイパーセンサーも破損してしまうみたいなんです。そのためにですね、ＬＩＯＨに安全装置をつけてオートで発動させないようにしたみたいですよ」

真耶の説明にようやく納得言ったトウマに千冬は
「納得できたならさっさとＩＳをつけて用意をしろ、装備は訓練機のものを使え」

トウマは千冬に急かされ、ＩＳを身に纏っていく。一度装着しているためその工程は非常にスムーズであった。
そして、ピット内に予め用意されてあったアサルトライフルとＩＳ用近接ブレードを手に持ちピットゲートへと進んでいった。
「トウマ、勝てよ」
「おう！」
一夏の激励にトウマも答え、軽く拳同士をぶつけた後に大きく息を吸い込み
「・・・トウマ・カノウ！行くぞ！！」
その叫びを合図にアリーナに向けて翔けだした。

上空では、先に待っていたであろうセシリアはトウマに向かってが余裕のポーズを取りながら
「あら、逃げずに来ましたのね」
「逃げる必要は無いからな」
セシリア軽い挑発をトウマ平然と受け流した。
それを確認したセシリアは再度挑発を行なう事はせず、トウマのＩＳを見つめ
「さあ、踊りなさい。私セシリア・オルコットとブルーティアーズの奏でる円舞曲で！」
このセシリアの宣言にて、クラス代表決定戦トウマ対セシリアが始まった。

先制はセシリアのレーザーライフル『スターライトｍｋＩＩＩ』射撃。その射撃はライフルの威力もさることながら代表候補生の名を持つだけあり、狙いも正確無比であった。
トウマは特機型の大雷鳳を駆っていたため回避はあまり得意ではない。しかし、それが通用し生き残れるような戦場は一つも無かった。確かにセシリアの射撃は正確無比であるが、戦場を駆けぬいたトウマがさらされた攻撃に比べ素直すぎた。
更に、トウマが心の師と仰ぐゼンガー・ゾンボルドの親友レーツエル・ファインシュメッカーの砲撃を思い浮かべるとセシリアを脅威には感じられなかったのだ。
その為、シールドバリアーに掠めエネルギー残量を減らすものの機体に直撃させるような事はさせなかった。

しかし、ＩＳでの戦闘が初めての事なのかトウマはセシリアに翻弄されていた。
散発的に手に持つライフルで反撃をするものの、銃の扱いは訓練は受けていても実戦で使ったことなど無い。
そして、高機動と射撃戦を得意とするセシリアに命中できるわけも無かった。
その為、早々に射撃での戦闘を諦めアサルトライフルでの捨てて、ブレードによる近接戦闘に切り替えたのだ。

トウマの順応力は高く、初めてのＩＳの戦闘であっても翻弄されながらも有効打を許さずに反撃の機会を狙える状況を組み立てているのだ。しかし、本来の実力から言えばこの苦戦など論外。ならば、戦闘経験の豊富なトウマが何故こんなに苦戦するのか？
それはトウマが大雷鳳と同様の感覚での戦い方をＩＳに強いた事が原因であった。
作られた思想からして、まったく違う機体なのだから戦い方が同

じわけが無い。その為に操縦者と機体が喧嘩を起こしてしまっていたのだ。

更に対するはイギリスの代表候補生というクラス内での実力者セシリア・オルコット、得意のする距離がトウマのレンジ外からという相性の悪さ

その為にトウマは思い通りに戦えずに攻めあぐねた。
また、セシリアもトウマに攻撃が掠めるものの、有効打は与えらずにいた。

その結果、状況は膠着し時間だけが過ぎていってしまったのだ。

膠着状態になり１０分程経過した頃

「あら？さきほどまでの威勢はどうしたのですか？」

現在トウマは追い込まれていた。
始めのうちは、気にならなかった体の違和感は時間が経つたびに大きくなり、痛みを覚える迄になっていた。
更に機体の反応速度も時間が経つたびに落ち、トウマの動きに着いてこなくなっていた。
その為、最初は余裕をもって避けられていたセシリアの攻撃も今は機体を大げさに動かす事で何とか避けていると言う、後数分も戦えば詰みになってしまうであろう状況であった。

ピット内から時間が経つうちに動きが悪くなるトウマを千冬は訝しげにみていた
（・・一体どうした？動きがどんどん悪くなるな・・）
そんな折、戦況を見ていた真耶が驚愕の声を上げた
「お、織斑先生大変です。カノウ君のＩＳの稼動効率がどんどん下がっています」
「何？」
「最初のころの稼働率が５３％。現在２６・・いえ２３％まで落ちています」
「馬鹿な、そこまで落ちるのはずがない・・」

この事態には千冬も予想外であった。
ＩＳの調査の折、機体全てを確認したが
何故このような自体が起きたのか？
考え込んでいた千冬はある仮説にたどり着いた。
「・・まさか・・カノウの反応速度にＩＳが追いつけていないのか？」

そう原因はインターフェイスの反応速度の差である。
従来のＩＳに使用されているインターフェイスであるイメージフィードバックシステム
頭で考え、それをＩＳが認識し肉体と同時に動くと言う形になっている。
その為、一般人でも起動さえ出来れば動かす事ができるのだ。

ＩＳはその特性上一般人の人間の反応速度を基本設定されていた。
しかし欠点もある。
それは超人的な反射速度を持つ人間が扱ってしまった場合である。
早すぎる反応速度に肉体の動きとＩＳの動きが同期する事ができなくなる。
そこまでいくと最適化程度では対応しきれずに、ＩＳの設計段階からの徹底的なカスタマイズを行なう必要があるのだ。しかし、それは例外中の例外であまり大きな問題とされていない。
故に、インターフェイスとしては最上級のシステムなのだ。

しかし、トウマにとってはイメージフィードバックシステムでは反応速度が遅すぎた。
大雷鳳の奥義「神雷」は１／１０００秒を確実に認識し反応しなくては成功しない神技である。
この神技を会得した為に、トウマの戦闘時の反応速度は常人とは比べ物にならないほど高い。
更に戦闘状態で高まった集中力は反応速度を高まっている。
そう、イメージフィドバックの例外中の例外だったのだ。

そして、愛機に搭載されていたインターフェイス「ダイレクト・モーション・リンク」の影響も大きい。
ダイレクト・モーション・リンクは体の動きがそのまま機体に反映されるシステム
１／１０００秒の世界で動くトウマに機体も１００％同期させる事の出来るのだ。そこに情報伝達用タイムラグは無かった。
人機一体の思想の基に作られており、強い意志と揺るがぬ信念を持つものにしか使いこなす事ができない元の世界でさえ完全に使いこなしたのは３人しか確認されていないと言う使い手を選ぶシステムなのだ。

兵器としてみるのならはダイレクト・モーション・リンクはインターフェイスとしては落第なのだろう。
だが、乗りこなせる操縦者が居ればその力を１２０％引き出す最高のインターフェイスでもあるのだ。

そして、トウマ自身乗りこなせた３人の内の一人であった。

トウマがＩＳで動く度に体に感じた違和感の正体は、トウマの動きにイメージフィードバックの反応速度が追いつけず、関節の動きを瞬間的に機体が妨害したため体に負担を与えていたのだ。
それは量産をベースに考えられたイメージフィードバックと完全特機仕様であるダイレクト・モーション・リンクの反応速度の差であった。
モビルスーツなどの起動兵器であれば反応速度が遅い程度であったのであろう。しかし、ＩＳはパワードスーツであり操縦者の体に密着しているのだ。
その為、動きに同期していなければ動くたびに操縦者に負担となってしまう。

更に悪い事に、トウマの体に負担が掛かっているとシステムが判断し、操縦者の負荷を減らすためにと反応速度を落とし始めたのだ。

千冬を始め、ＩＳを調査した研究者にとってもＩＳが人の反応速度についていけないずシステムが誤認識をするなどは、想定外のバグであったのだ。

量販店で売られている一般のＰＣをＩＳとし、トウマを動作に要求されるスペックが非常に高いソフトと仮定するなら分かりやすいと思う。

ソフトの要求スペックをＰＣが満たしていなければ、ソフトはその機能を発揮しない。最悪ＰＣ事態がフリーズし動かなくなるのだ。
その状態でも、設定をいじればなんとか動く事もある。しかし、トウマ言うソフトは設定を最高の状態にし動いていたのだ。

その結果、最悪の事態が起こった。

ピット内で千冬が考えている間に、トウマの動きが止まりゆっくりと地上に着陸した。
そして、トウマのＩＳの情報を知らせるディスプレイには

システムエラー

一時機能の停止

システムＬＩＯＨ用安全装置解除

インターフェイス「イメージフィードバックシステム」活動停止

インターフェイス「システムＬＩＯＨ」を起動します

ＩＳのメインシステムは停止したインターフェイスの代わりに、それに準じるシステムとしＬＩＯＨを起動させたのだ。
そして、本来あったはずの安全装置は、システムエラーのショックで停止してしまった。

安全装置によって封印されたはずであったシステムＬＩＯＨは、システムエラーの隙を突き、その姿を現したのだ。

『パイロットノ　脳波　脈拍　規定レベルヲ　突破　システムＬＩＯＨ起動。オペレーションシステム　シフト』

千冬と真耶が見ていたディスプレイにその表示が映し出された。そして、その耳にトウマの苦悶に満ちた声が聞こえてきたのだ。
そう、ＬＩＯＨが発動した瞬間、トウマは激しい頭痛と、体が引きちぎられるような痛みに襲われていた。

（ぐ・・・この痛みは・・まさか、ＬＩＯＨが起動したのか）

この人間の潜在力を引き出すシステムは操縦者の体に大きな負担を強いる。
この痛みはかつてＬＩＯＨに振り回され強引に潜在能力を引き出されて戦っていた時に感じた痛みであった。

そして、悪い事に強引に潜在能力が開放されたことにより、

ＢＭ？防衛線、ケイサル・エフェスの最終決戦で溜め込まれた疲労
今までＩＳとかみ合わない機動によって体に与えられ溜め込まれた負担
それらが相乗効果となり、肉体の負荷の限界値に達し、あのモードの発動条件を満たしてしまった。

『稼動効率ＸＸＸ・・・。システムＬＩＯＨファイナルモードに以降』

かつてトウマが発動させてしまったシステムＬＩＯＨファイナルモード

潜在能力を引き出し戦い抜いた肉体の負荷が、一定以上超えた兵士を狂戦士と変えるモード

狂戦士には、敵味方の区別など存在しない。目に映るもの全てが敵なのだ。

その力は、今までのＬＩＯＨによる潜在能力が引き出した力など比ではない程に強い。

兵士の命を燃やし潜在能力以上の力を強引に引き出しているのだ。

だが、狂戦士になったものは、もう元には戻れない

その命が尽きるまで敵を倒し破壊する修羅になるのだ。

その様子をピットから眺めていた一夏と箒はトウマの様子を不思議がっていた。

「トウマのやつ、一体どうしたんだ？」

「機体のトラブルか？」

「いかん！、試合は中止だ！！」

事前に話を聞いていた千冬は叫び声を上げた。

普段聞かない千冬慌てた声に一夏は「ち、千冬姉・・」と呟き驚いた表情を浮かべていた。普段であれば「織斑先生だ」と頭を叩かれ叱られるのだが、今回は完全に無視である、その為一夏も事態が

深刻であると理解し黙って様子を見ることにした。

「え、・・は、はい。試合中止させます」

そして同様に真耶も驚いた表情を浮かべたが、すぐさま試合終了の作業を始めた。

「・・そ、そんな・・織斑先生！中止できません！」

「どういうことだ！？見せてみろ」

真耶の報告に千冬が慌ててパネルを操作を行ない始めた、その時耳元で

「ちーちゃん、邪魔しちゃだめだよ。これからが良い所なんだから」

その声が聞こて千冬の手が止まった瞬間、ピットを隔離するように隔壁が降り外部へ出れなくなり、反応しないシステムのため外部に連絡も取れない完全な隔離状態となってしまった。

しかし、千冬たちの居るピットが隔離された事など今の現状に影響を与える事も無く、状況は進んでいった。

「カノウさん、急に止まって、一体どうしましたんですの？」

急に停止したトウマの様子を不思議そうに見ながらセシリアが近づいてきた。

その瞬間、トウマの目の前が真っ赤になった

「ＷＯＯＯＯＯＯＯっ！！」

それは、獣の咆哮、そして体から吹き上がる殺意が湧き上がり、トウマは目の前の獲物セシリアに向かってゆっくりと顔を向けた。

殺意の塊をその身に受けセシリアは一瞬にして気圧されてしまった。
ＩＳは撃墜される危険性はあるものの、命は保障されている。
そして、訓練しているがセシリア自身まだ高校一年の女子なのだ。
トウマから発せられたのは敵、獲物であるセシリアを確実に倒す・・殺すと言う明確な殺意。
自らの死に直結するような殺気にされされ臆するなと言う方が酷である。
それでも、引かずに目を逸らさず迎撃できる姿勢をとったのはセシリアの心の強さか、プライドの高さによるものかは分からない。
本来逃げるのが正しく、迎え撃つのは一見無謀であった。
だが、この場合それが正解であったようである。

セシリアの顔を見た瞬間にトウマの動きが止まったからである。

そのまま、しばらく時間が経った後、トウマは右手に持っていたブレードを投げ捨て、叫びと共に右手でトウマのＩＳに装着されているゴーグルを引き離したのだ。
「うおおおおおおおおおっ！！」
そのトウマの叫びは先ほどの獣のものではなく、意思を持つ人の雄叫び
そして、トウマが引き離そうとしたゴーグルはシステムＬＩＯＨであった。

本来、ファイナルモードは片道切符
発動したら戻ってくる事は出来ない。
だが、トウマは仲間の手助けがあったとはいえ生還しているのだ。

その事により若干ではあるが耐性が出来たのであろう。そして、幾多の戦場を巡りシステムＬＩＯＨを超える強さとその戦いで磨かれたあくなき闘志はシステムに飲み込まれるのを拒んでいた。

目の前に居るセシリアの顔を見たとき、彼女がクラスメイトであり仲間なのだということを認識したのだ。

かつてＬＩＯＨに飲み込まれ暴走し仲間に対して刃を向けてしまった。

そして、再びＬＩＯＨに飲み込まれ仲間に傷つけるのでは、トウマを信じてくれたαナンバーズの仲間を侮辱することになるのだ。

トウマにとってそれは受け入れる事など出来ない。

故に闘志を燃え上がらせ、ＬＩＯＨを排除した。

（俺はＬＩＯＨには負けない！！）

引きちぎられるゴーグルはＬＩＯＨは悲鳴を上げならが、ハイパーセンサーから引き剥がされていく。

その過程でハイパーセンサーの機能が死んで行くが今のトウマには気にする必要も無く、ＬＩＯＨを排除していった。

そして、肩で息をするトウマの足元には引き剥がされ破壊したＬＩＯＨが転がり、頭部のハイパーセンサーはボロボロになっていた。

いくら対戦相手であってもその尋常でない様子に不安そうにしていたセシリアに、ゆっくりとトウマは落ち着いた声で

「悪かったな、セシリア」

「カノウさん、さっきのは一体なんなんですの？」

「たいした事じゃない。それより決着をつけるぞ」

セシリアも馬鹿ではない、トウマの嘘なのはすぐ分かった。

自分で自分のＩＳを破壊する事態など、「たいした事が無い」な

どありえなかった。
しかし、トウマの意思のこもった声に応じ
「そうですか・・では、手加減はいたしませんわよ！」
「応！」
その言葉と同時にセシリアは上空に舞い上がって行った。
セシリアの姿を見送った、トウマはかつてＬＩＯＨを克服しミナキに懸けた言葉を思い出していた。
「君は俺の闘志を教え、力を与えてくれた」
「君の雷鳳に懸ける思い、人々を守ろうとする思いは俺を変えてくれた」
「俺にはそれで十分だよ」
「何も言わなくていい。俺は自分の意思で戦うことを選んだ。その気持ちはずっと変わらない」
「雷鳳は地球を守る力だ。これからも・・そして、これからも」
トウマの思いに応えるかのようにスラスターにあるプラズマコンバータが放電を行ない、システムが停止したＩＳがゆっくりとトウマの動きにあわせて動着始めた。
メインシステムの大半が停止し、代用システムであったＬＩＯＨも消失した。
本来動けるわけ無いのだ。しかし、其れがトウマの意思に呼応するように動くのだ。
トウマはＩＳの様に、αナンバーズの仲間を思い出した。

生命に進化を促す無限力をその身に宿した３つの姿を持つ機神を駆る三人の戦士達を
勇気を力に変えていかなる脅威を突破してきた鋼の体を持つ勇者の王たる破壊神を
かつての仲間を思い出しトウマは一つの確信を得た。
（こいつは・・竜馬や凱達を知っている。）

そして、戦士としてスタートラインに立った時、ゼンガーに対して告げた言葉が頭に浮かんできた

「今はあんたの方がずっと先を進んでいる・・」

「だけど、今日の戦いで決めたよ。いつかあんたに追いついてみせる・・ってな」

「望むところだ。俺と雷鳳は今日より明日・・明日より明後日、強くなる・・！」

（そうだ！・・ならば、こんなところで躓くわけにはいかない！）
燃え上がる闘志に応えるかのように、プラズマコンバーターから発せられる放電は大きくなり、プラズマを発生し始めた。
ＩＳのシステムと言う楔、システムＬＩＯＨと言う枷が消えた事でトウマにはかつての愛機の存在を感じる事が出来のだ。

トウマのＩＳがプラズマを発生させたのを確認したセシリアは
「・・プラズマコンバーター、それがカノウさんの切り札ですのね。わたくしも本気でいきますよね」

セシリアの声にスラスターに取り付けられている特殊装備「ブルー・ティアーズ」は一斉に起動した。本来、自立機動兵器であり高い機動力であらゆる角度からのオールレンジ攻撃がこの兵器の売りであり、その特性上、セシリアは意識を制御に集中させる必要があった。

しかし、トウマが動かないこの状態では高機動での制御を行なう必要は無く、セシリアはブルー・ティアズを砲台と見立てることで火力を上げる事を選んだ。

戦法が決まったセシリアは、展開した４つの「ブルー・ティアーズ」をライフルを中心に円状に配置し、トウマに向け一斉射撃を行なった。

５つの銃口から放たれた光弾は、数を増やしあっという間にその数を増やし光弾による弾幕となってトウマに襲い掛かった。

トウマの目の前には、セシリアの弾幕が迫った。

しかし、トウマは臆することなく己の機体に対し呼びかけ、闘志を燃やした。そして

「燃え上がれ、俺の闘志！　俺の闘志に応えるならば戻って来い！！」

その叫びに呼応し、トウマの全身を覆うプラズマは眩い輝きを発した。しかし、光弾を無効にする訳でもなく、弾幕は一方的に降り注ぎそれのより出来た土煙の中にトウマの姿は消えていった。

これほどの弾幕の直撃を受ければシールドエネルギーは尽き、普通であれば試合終了である。

「何かあるかの思ったのですが、意外とあっけなかったですわね」

弾幕を放ったセシリアは、トウマの居た場所に漂う土煙を見つめていた。

（・・ここまでのようですわね。）
自分と互角に渡り合い、ＩＳを自らの手で破壊してまで自分に向かってきた姿にはセシリアは父には無かった何かをトウマから感じていた。
だが、アレほどの弾幕をくらい土煙を上げているのだ、もう立ち上がれる訳はないであろう。
その事をセシリアは残念な感情を覚えトウマが居たであろう土煙の舞う場所を見つめていた。
そこであることに気がついた。

（・・土煙？・・まさか！）

セシリアのＩＳが扱う装備は光学兵器がほとんど、今回の弾幕で使用したのも光学兵器だけであったのだ。
光学兵器はミサイルなどの兵器と違うＩＳに直撃したとしても爆発や土煙など起きるはずは無い。
では、何故土煙など発生されたのか

「・・・カノウさんは・・居ない？！」
晴れていく土煙の中にトウマの姿は無かった。
セシリアは周囲を見回し
「どこに行きましたの？」
慌てて索敵を行い始めた。
その時、センサーが上空から落下してくる物体を感知した。

慣性制御などしていなら墜落・・いや着地したものをセシリアは目を凝らして確認した。
新たに生まれた土煙の中から

「セシリア今まですまなかった。これからが本番だ！」

トウマの声が響いた

～蘇る雷の鳳～

セシリアが確認したその姿は、第一形態移行とも違う、第二形態移行でもありえない変化であった。

標準の部分装甲は全身装甲に変化し
スラスター部は存在しない
カラーリングはトウマが身に着けていたＩＳと同様、白を基調とし各部に黒と金色の装飾
胸部をはじめとし体の各部には、赤い宝玉のようなパーツが組み込まれており
スラスターであったプラズマコンバータは脚部に装着されている
頭部じゃ赤い宝玉を中心に持つ金色の前飾りを持った黒い兜
その首に真紅のマフラーを巻いたトウマの姿があった。

全身装甲になったためか、全身フォルムはＩＳのものから完全に人間の物へと変化していた。
ファルムが完全に人の形に変化したため全身はＩＳに比べ小さくなっていた。
しかし、発せられる威圧感は、セシリアに大きな巨人と言う感覚を与えるのに十分であった。

その姿は改造され大雷鳳になる前の姿、かつてのトウマの愛機・雷鳳の姿であった。
この世界に来た折に、ＩＳの姿に変えられシステムと言う楔とＬＩＯＨと言う枷に封印が解け本来の姿になったのだ。

故に、この機体はＩＳ「ＬＩＯＨ」ではない。
トウマの闘志に応え、トウマのために蘇った機体ＩＳ「雷鳳」なのだ。

トウマの姿を驚愕の表情で見つめていたセシリアであったが、先ほどのトウマの言葉が脳裏に浮かび気を引き締め
「その姿は後で聞かせて頂きますわ。でも、今はカノウさん・・いえトウマさん、あなたの力見せていただきますわよ！！」

「応！行くぞ！セシリア！！」

そのセシリアの言葉に応じ、トウマは覇気の満ちた顔で雷鳳をセシリアに向けて駆った。

第四章（後書き）

前回の言い訳ですが、雷鳳は、理詰めの量産試作機がスーパーロボット「大雷鳳」になる展開が魅力なのかと思い、前回量産型のＩＳＬＩＯＨを出す形にしたのです。

後、大雷鳳は最初から出すと強すぎで話の途中で伸び悩むと思い、この場では雷鳳を出す事にしました。

構想では、トウマが元気な状態で雷鳳だす事も考えたのですが、その場合ライジングメテオが解禁で文字通り砕け散るセシリアしか思い浮かばなかったので、却下した結果がこれです。

ライジングメテオは対人に使うのは危険だと思うのでちょっと方法考えようと思います。

第五章（前書き）

感想にユーザー制限が掛かっていたのを解除するの忘れていたので解除しました。

第五章

～クラス代表戦決着～

クラス代表決定戦当日　トウマＶＳセシリア戦

セシリアの目の前でトウマのＩＳはその姿をＩＳ「雷鳳」へと変えた。
既存のＩＳとは全くの別物、現存するＩＳのどのタイプにも該当しない
その姿に観客席からクラスメイトの驚愕の声が聞こえ、セシリア自身も驚愕の表情を浮かべた。

「・・・ま、まさか、二次移行？！」

確かに二次移行ならば可能性はあるかもしれない。しかし、二次移行とは思えない程に変わりすぎたその姿に、その言葉はセシリア自身が心の中で否定した。

トウマと向き合うセシリアは心の中で困惑と同時に別の感情が生まれてくるのを感じていた。

しかし、その感情に向き合う事は許されない

なぜならば、目の前に居るトウマから発せられる威圧感に隙など見せることが出来ない

そして、セシリアの意識は否応無しに戦闘に集中する事なっていた。

トウマのＩＳの様子を観察していたセシリアは武器を持っていない事に気づき

「トウマさん、武器を拾ってはいかかですか？待って差し上げますわよ」

「かまわない、俺はこれで十分だ」

セシリアの問いにトウマは構えを取って返事を返した。

その答えに、セシリアは若干不審に感じたもののすぐさま頭を切り替え、上空で地上に居るトウマに狙いを着けつつブルーティアーズを起動させ

「そのＩＳ・・このセシリア・オルコットが見極めて差し上げますわ！！」

その言葉と同時にレーザーライフ「スターライトｍｋＩＩＩ」の引き金を引き光弾を打ち出した。そして、打ち出された光弾を合図にブルーティアーズは一斉にトウマに向かい襲い掛かった。

ライフルの光弾は直線的で避けるの難しくは無い現に先ほどもトウマは避けていたのだ。セシリアの予想通りに、トウマはライフルの光弾を避けた。

それを確認したセシリアは、トウマに狙いをつけているブルー・ティアースを四方向からの一斉攻撃を行う。

自立機動兵器（ＢＴ兵器）によるオールレンジ攻撃は避けるのは難しい。現在トウマがいる地上では、ＢＴ兵器本来の攻撃範囲に対して攻撃範囲は１８０。と狭まれているが、それと同時にトウマの回避範囲も狭まっているのだ。更に上空を押さえているというアドバンテージは大きい、その為空中に居るよりもよ有利に攻撃を行なう事が出来るのだ。

ＢＴ兵器とは、単発の火力は低いが、高い機動による死角からの回避困難な制圧射撃による総合火力は高く、その手数により敵を撃破するものである。

更に、ＢＴ兵器はこの世界では実験段階の兵装であるために対応策など皆無。

「紙一重だ…無駄なモーションはいらない…！」

ブルー・ティアーズから豪雨のように降り注ぐ放たれる閃光をトウマは一歩、もしくは半歩体勢を変えることで機体に掠める程度に避け、直撃しそうな攻撃は手の甲に備わっているプラズマコンバーターうを応用する事で紙一重で受け流していった。

それはまるで、ＢＴ兵器を知っているかのように無駄の無い動き。

（・・この武器は、ファンネルみたいなものか・・）

この世界では、実験兵装である「ブルー・ティアーズ」ではあり対処の方法は確立していない。

しかし、トウマにとっては馴染みのある自立機動兵器「ファンネル」との戦闘経験があるおかげで対処が可能なのである。

ニュータイプ能力の無いトウマがファンネルなど使えるわけ無い

ならば、トウマが何故使えない「ファンネル」に馴染みがあったのか？

αナンバーズでのエース「アムロ・レイ」の狩るＨｉ－νガンダムが搭載しているフィン・ファンネルは確かに記憶に残っている。

だが、それ以上に訓練の鬼「剣　鉄也」の課した、

『対宇宙怪獣用の特訓』が原因であった。

内容は、大まかに言うと２機のキュベレイの放つ最大２０機のファンネルからの攻撃に対応しながら戦闘を行なうといったもの。

その為に、トウマは「ファンネル」には馴染みがあり対処が可能だったのだ。

敵の中にもＢＴ兵器を使ってきた者も居たが、それ以上に宇宙怪獣やバッフクラン等の物量で襲い掛かってくる敵の戦闘経験が大きい。

完全回避こそは出来ないものの、今更ＢＴ兵器が４機襲い掛かってきたところで脅威には感じられないのだが

（ＬＩＯＨの影響で、体が重い・・激しく動けるのはせいぜい数回が限界か・・）

実は、今までトウマの体に溜め込まれた負荷が大きく戦闘を長引けない状況であったのだ。

その為、トウマは短期決着の方法を考えた。

（ファンネル系ならば狙い目は、あのタイミングだ！）

セシリアが状況的には有利であったはずだがトウマを追い込む事が出来なず焦りを覚えていた。更に、ブルー・ティアーズの制御に集中する事によりそれ以外の攻撃を行なう事が出来ないのだ。

ＢＴ兵器はある超常的な能力が無ければ使用することが出来ないとされている。

それは、能力が無い人間では機体に搭載されているインターフェイスに反応しないのだ。

仮に反応したとしても、制御に意識を集中してしまうために機体制御が鈍くなり敵味方入り乱れる戦場では的になってしまう。

その為、特殊な能力が人間無いがＢＴ兵器を使おうとするのなら、例を挙げるのでセレーナ・レシタールが駆るＡＳアレグリアスが搭載している「サーバント」が分かりやすいであろう。

彼女自身は戦闘訓練を受けたエージェントであるが特殊な能力は持っていない。しかし、ＢＴ兵器「サーバント」を使用できたのは自立思考の出来るＡＩ「エルマ」のサポートがあったからなのだ。

特殊な能力の無い人間がＢＴ兵器を使用するのならばサポートを行なうシステムの存在が必須であるのだ。

そして、実戦での技術的ノウハウが存在しない実験機であるブルー・ティアーズにはサポートＡＩは無い。

その為に操縦者であるセシリアの負担が大きいのだ。

その結果、数回の攻撃を行なうものの全てが有効打にならなずに、エネルギー残量、セシリアの集中力が共に厳しくなっていた。

セシリアはブルー・ティアーズの充電と意識の息継ぎを行い、仕切りなおす選択をした。自分の下に戻す命令を送りブルー・ティア

ーズが帰還を始めた瞬間

今まで、防戦であったトウマが攻勢に転じた

「これを待っていた！今度は、こちらから仕掛ける！」

力を溜め込みながらその身を屈めに右手を地面に叩きつけた。

次の瞬間、雷鳳は物凄い勢いで上空へ飛び上がり、あっという間にセシリアを見下ろす位置にまで来ていた。

ＢＴ兵器は、圧倒的なオールレンジ攻撃が利点であるが、戦闘と言う過度の緊張を受ける場での使用者への負荷が大きく長時間の展開しての戦闘には向かず、、エネルギーが切れれば機体からの再充電できない使い捨て型と機体から再充電が出来る充電型がある。

両方に本体も各自に動くため内部にバッテリーを持っているのだが、長時間の使用ではエネルギー切れを起こし使用不可能になってしまうために、充電型はある程度時間が経つと、再充電のために機体に戻らせなければいけない、使い捨ては武装が減少していくという弱点を抱えている。

トウマが居た世界では、この弱点を補うために使用個数の制限による時間差展開や機体自身との同時戦闘による高機動戦闘によってタイムラグを失くすなどの対策をとられていた。

そして、セシリアの持つブルー・ティアーズは充電型。しかも、この世界では実験機でありこのような対策は無く、むしろこの弱点が発見されているかさえ怪しいところである。

セシリア自身も全力で攻撃を行なう事に集中するあまり、ブルー・ティアーズが帰還する一瞬の隙を意識することは出来なかった。

そう、この隙こそトウマが狙っていた瞬間

「プラズマコンバータ、展開！」

上空に位置した雷鳳はトウマの掛け声により、脚部に備わっているプラズマコンバーターの装甲が展開し、強力なプラズマエネルギーを発生させながらセシリアに向かい飛び蹴りを放った。

「ライトニングフォール！　ぶち抜けーっ！！」

このプラズマエネルギーは、先ほど盾の代わりに使っていたものとは比べ物にならないほどの出力で、雷鳳をエネルギーで覆い隠くすほどである。

更に、雷鳳の速度が合わさり巨大なプラズマの光弾と化してセシリアに向かい襲い掛かった。

雷鳳が目の前に迫ってきた瞬間、セシリアはブルー・ティアーズの制御を諦め後方へ逃れる事を選択し後方へ逃げようとした。

その直後、セシリアとブルーティアーズの間に光弾と化した雷鳳の飛び蹴りが激突したのだ。

直撃のタイミングで襲い掛かってきたトウマの攻撃をセシリアが避ける事ができ、更に制御を諦めたブルー・ティアーズにも攻撃が当たらなかったのは運が良かったと判断できるであろう。

次の瞬間までは

雷鳳のセシリアの目の前の空間に激突した瞬間、膨大なプラズマエネルギーが暴力的な衝撃波となって襲い掛かってきたからである。

「ライトニングフォール」はワイドレンジ攻撃に分類される。

その本質は蹴りによる直接的攻撃が目的ではなく、目標地点に激突した衝撃とプラズマエネルギーの爆散による衝撃波を周囲に解き放つ範囲攻撃なのだ。

プラズマエネルギーの渦に飲み込まれた４機のブルー・ティアーズはなすすべも無く引き裂かれ、衝撃波により打ち砕かれ撃墜されていった。

セシリア自身も衝撃波にさらされたのだが、後方に逃げようとした事が功を奏し、吹き飛ばされながらも衝撃波を直撃を避けることが出来たのだ。

更に、シールドバリアーのエネルギーは大きく消費されたが絶対防御が発動する事を防ぐ事が出来た事も幸いであった。

一回の攻撃で４機のブルー・ティアーズを撃破され、直撃では無いのに大きなダメージを受けたセシリアは動揺を覚えつつも機体の姿勢を整える事に専念しようとした。

しかし、トウマはセシリアの行動を許す暇を与えない。

「プラズマビュート！　奴を逃がすな！」

プラズマの渦の中から響いたトウマの叫び声と共に一筋の雷が衝

撃波を切り裂きセシリアに向かい襲い掛かった。
その雷は、初動が遅れ回避が間に合わないセシリアを絡めとり、逃がさない為にその姿をプラズマの檻に変えた。

更にセシリアはプラズマの檻からの脱出を行なおうとする前に、プラズマの渦の中心へ向かい急速に引きずり込みはじめたのだ。

セシリアは引きずり込まれながらも、プラズマの渦に引きずり込まれダメージを与えるのが目的であると推測した。
しかし、目の前のプラズマの渦は先ほどの暴力的はエネルギーは感じられず拡散し初めている。

薄れていくプラズマの中心部にはトウマが待ち構えていた。
その姿は、雷により引き寄せたセシリアに更なる攻撃を行なうために構えを取っていた。
目の前のトウマから放たれる威圧感にセシリアは思わずその手に持っていたライフルを盾の様目の前に出していた。
セシリアが動作を終わるか終わらないかの瞬間

「砕け！　カウンターブレイク！」
目前に迫ったセシリアに対して、トウマは叫びと共に飛び後ろ回し蹴り放った。

この技はかつてトウマが雷鳳を駆っていた時に、数々の戦場で最も多く放った技
そして、戦いの中で磨かれ抜かれ、最も多くの敵全てをその力で蹴り砕いてきた。

雷鳳の必殺技の一つ『　カウンターブレイク』

この技にとって、シールドバリアーを蹴り砕くのは必然。

さらに、トウマの駆け抜けてきた戦場ではバリアは破られるもの、破るものと言う認識であるのだ。

しかし、シールドバリアー・絶対防御に依存しているＩＳでは話は別である。

引き寄せた勢いを得たとはいえ、ただの蹴りである。

ただの回し蹴りのはずなのだ。

その蹴りは、シールドバリアーを貫いてくるのだ。

特殊な力は持っていないただの蹴りが、最新鋭の兵器の攻撃をも受け取られるシールドバリアーを力で引き裂いてくるのだ。

そして、それを受けるセシリアにとっては悪夢以外の何物でも無い。

ブルー・ティアーズの性能為かセシリアは、カウンターブレイクを絶対防御が発動する直前でシールドバリアーで受け止める事に成功はした。

しかし、その代償は安くない。セシリアは受け止めた衝撃により弾き飛ばされてしまったのだ。

浮遊・加減速に使われるＩＳの基本システム「パッシブ・イナーシャル・キャンセラー」の本質は、推進剤を使用せず尚且つ確実に運動エネルギーを中和して『停止』状態に近付ける事が可能とする

慣性中和装置である。
一見航行に有効に思え、ＩＳでも飛行のみを使用されているように思われている。
しかし、その本質は防御、特に衝撃を受けたときのＧ緩和にその力を発揮する。

特にＩＳは兵器としてのサイズが小さい。
現在ＩＳによって廃れた近代兵器の特に大型ミサイルなどの直撃を食らった場合には、イナーシャル・キャンセラーが存在しなければ、いくらシールドバリアーが強固であっても衝撃を殺しきるだけの質量も衝撃を吸収するクッションも持たないのだ。
そして、シールドバリアーで機体へのダメージを失くす事が出来ても、急加速や急停止、旋回などの空中戦によるＧを緩和でき無ければ操縦者の生命に著しいダメージを与えてしまうのだ。

本来、高速飛行によるを強力なＧが掛かる戦闘機など操縦者は対Ｇ訓練を必要とする。しかし、ＩＳ操縦者にはそのような訓練を必要としないのも、イナーシャル・キャンセラーの恩恵である。

そう、ＩＳが兵器として成立しているのはイナーシャル・キャンセラーによるところが大きい。

そして、今回もイナーシャルキャンセラーの恩恵により、セシリアは悲鳴を上げながらおよそ１０Ｍ程吹き飛ばされ衝撃を緩和させ停止する事に成功した。
トウマの追撃を警戒したセシリアは慌てて体勢を立て直した。そして、追撃がこない事を確認すると、反撃とばかりに手に持っているライフルの照準を合わせ引き金を引いたのだ。

しかし、いくら引き金を引いてもライフルは沈黙をしてたまま、光弾を撃ちださなかった。

セシリアがライフルの方へ視線をむけ驚愕の表情を浮かべた

ブルーティアーズの主力武器であるレーザーライフル「スターライトｍｋ？」の銃身がなくなっていた。

トウマの放ったカウンターブレイクを「スターライトｍｋ？」はセシリアの盾となる代償として、その身を蹴り砕かれていたのだ。

セシリアにとって、最大の武器であるレーザーライフル「スターライトｍｋ？」。そして自立稼動兵器「ブルー・ティアーズ」レーザー型４機が、トウマの放ったたった２回の攻撃によって破壊されてしまい残された武装は、少なく自立稼動兵器「ブルー・ティアーズ」ミサイル型２機と接近戦用のショートブレード「インターセプター　」と限られたものしかない。

相手が同格であれば、まだ勝機はあるのであろう。

しかし、圧倒的な戦闘能力をもつトウマに対しては絶望的。

更に、セシリアには残された武装による戦闘パターンが無かったのだ。

状況的にはセシリアは詰んでいた。

しかし、実はセシリアには勝機はあった。

それはトウマの体力とＩＳのエネルギー残量である。

いくらＩＳの形が変化しても、今までの戦闘でエネルギー残量はブルーティアーズに比べ欠しい。

そして、セシリアにとって、最も恐ろしいであろう攻撃「ライトニングフォール」はエネルギー消費こそ無いがエネルギーストックの関係で3回しか使う事ができなく、後2回打たせれば使用することはできなくなるのだ。

仮に４発目を撃った場合、強力な広範囲攻撃のためエネルギー消費は非常に激しい。

ＩＳの戦闘では、相手のエネルギーを０にした方が勝ちとなる。

今回の状況ならば、最悪逃げ回って相手がエネルギー切れになるのを誘えばいい。

更に、トウマの体は今までの戦闘のダメージに加えＬＩＯＨにより限界に近づいているのだ。

確実な牽制攻撃とトウマの攻撃を食らってはいけないという絶対条件はあるが、時間をかけて逃げ回っても勝利は見える。

更に、４発目のライトニングフォールを撃たせ避けられることができれば、勝利が確定となる。

現状において、勝機としては十分であろう。

十分の勝機はあったのだ。

（なんで！なんで！体が動いてくれませんの？）

セシリアの体は凍りつきその場から動けなくなってしまっていた。
ＩＳの戦闘に慣れているセシリアの頭では、その勝機は見えていた。
だが、戦場で磨かれたトウマの攻撃により、セシリアの心は恐怖に侵食されていた。
そのために、セシリアの体は硬直し動く事が出来なかったのだ。

心が恐怖に支配された時、セシリアは勝利を諦めた。
そして、自ら敗北の言葉をその口から言おうとした。

「・・・わたくしのま・『試合中止。この試合は無効試合のため、両者引き分けとします』・け・・え？」
その時、試合を強制終了させるためのブザーがアリーナに鳴り響いた。

「これは一体どういうことですの！？」
負けを認めていたセシリアも急な試合中止の宣言に、戸惑いの声を上げた

「説明は後でする。それよりもカノウを早急に医務室へ連れて行け」
返答として聞こえてくる千冬から、予想外の名前を聞き驚くセシリアの耳に何かが倒れるような音が聞こえた。

「え？トウマさんを？」

音の方向へ視線を向けると、そこにはＩＳが解除され生身で倒れているトウマの姿があった。

「トウマさん！？しっかりしてくださいまし！」
セシリアは慌ててトウマに駆け寄り、その体を抱え医務室に向かいアリーナを後にしていった。

こうしてトウマのＩＳでの初戦は幕を閉じたのだ。

第五章（後書き）

なかなか話がまとまらず、予想以上に時間が掛かって申し訳ありませんでした。

最初の構想では、一夏や千冬の出番が多少あり、セシリアはもう少しがんばってもらう予定だったのですが話が長くなってしまうため、丸々カットしました。ごめんなさい

今回戦闘の流れなのですが、一夏の戦法を突くのだけでは面白く無いと思い、鉄也の特訓の影響にさせてもらいました。

少々身の回りがあわただしくなり更新が不定期になるかと思います

後、機体の設定などの詳しい説明は、読みたいと言う声があれば載せようかと思います

休止とお詫び

身の回りが慌ただしかった事もあり新作を仕上げるに大変時間がかかってしまい、申し訳ありません
本来は新作を投稿する予定だったのですが、新作が半ば完成となった折、ＰＣが壊れてしまいました。
当然ネタや新作を含めた全てのデータ消滅してしまった為、読んでいただいた方々には非常に申し訳ないのですが休止させていただきます。

ＰＣが使えない為、慣れない携帯での挨拶で見苦しい文章失礼しました。

言い訳になってしまいますが、携帯だと文章の上手く形に出来ない為、ＰＣ　が治れば、新作書きたいとは思っています

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9623t/

ＩＳ　～雷の鳳～

2011年12月5日04時49分発行